彩の国 企業探訪

株式会社　丸沼倉庫

貸倉庫事業を行う株式会社丸沼倉庫は創業からまもなく50年を迎える。同社は、高度経済成長のニーズに合わせて事業を着実に拡大してきた。その一方、自社の所有地に芸術家を志す人たちを集めて、長年にわたって活動の場を提供する“丸沼芸術の森”をつくるなど、社会貢献に優れた企業としても地元から高い評価を得ている。

丸沼倉庫が所有する貸倉庫（イメージ図）

■25歳で家業を継ぐ

JR武蔵野線を府中本町方面に向けて荒川の鉄橋を渡ると、やがて右手に巨大な倉庫群が目に飛び込んでくる。株式会社丸沼倉庫が所有する貸倉庫だ。およそ３万坪の広さに５棟の大型倉庫が並び、それぞれの倉庫には借手であるテナントの名前が記されている。丸沼倉庫は1969年５月、須崎勝茂社長の伯父、須崎三四氏が立ち上げた。高度経済成長の波に乗って、都心部近郊に商品などのストックヤードを持ちたいという企業ニーズは強く、都心から車で１時間圏内の朝霞市は物流拠点として好立地であった。こうした需要を背景に、丸沼倉庫の事業はスタート当初の1200坪から４年後の73年には２倍の3600坪に拡張した。順風満帆の家業を尻目に、須崎社長は大学を卒業後、地元の金融機関に勤務する。ところが入社して間もない77年に須崎社長の実父、須崎重治氏が亡くなると、伯父から“会社を辞めて、跡を継いでくれないか”と呼び戻される。考える暇もないまま、須崎社長は会社を退職し丸沼倉庫に入社する。ところが、入社２カ月後、今度は伯父が病気入院する事になった。病状は軽いものではなく、入院前に須崎社長は伯父に呼び出され、「通帳、権利書などを全て渡す。自分に万一の事があった時は、よろしく頼む」と言われた。あまりの突然の通告に須崎社長は動揺を隠しきれなかったという。25歳の時であった。

■叔父に背中を押されて30億円の投資を実行する

複雑な思いを抱きながらも伯父から事業を任された須崎社長は、経営者として一から倉庫業を学ぼうとしていた。そんな矢先、事業当初から入居するテナントから、倉庫を造設して欲しいと要望が舞い込んできた。相手はもし駄目な場合には引っ越しして出ていくという。須崎社長は突然の要望に驚いたものの、どうせやるなら思い切った倉庫を作りたいと考え、テナント側の希望する増設規模1700坪を大幅に上回る１万2000坪の倉庫を計画した。投資額は30億以上にのぼった。

倉庫を建設するための許可など必要な手続きは揃ったが、その規模の大きさに、自分で

発案しながらも決断が出来ず迷っていた。幸いにも伯父が退院してきて、自分の計画を説明すると、「俺が責任を取るから、おまえの好きにやれ」と背中を押してくれた。伯父の支援の元、倉庫の建設に取り掛かる事を決めたが、今度は投資資金30億円の確保に難航する。金融機関から融資を断られたのだ。須崎社長は、自身が金融機関に勤務していた経験から、融資は容易に受けられると高をくくっていた。優良テナントが付いているから大丈夫だと必死に説明するが、結局、どこからも融資を受けられず途方に暮れる。

そうした矢先、突然、ゼネコンの営業マンがひょっこりと事務所に現れた。“何かお困り事はありませんか”と飛び込みセールスであった。須崎社長は「別に困り事はないけれど、銀行から融資を得られないんだ」と投げやりに言うと、相手は「じゃあ、私がその30億円を用意すれば、当社に倉庫の建設を任せて貰えますか」と涼しげに答えた。

相手の提案に須崎社長は了承すると、営業マンは早速、ある信託銀行に話を持ち込み融資をまとめた。この時の事だ。営業マンが銀行の担当に説明をしていると、偶然、パーテーションを隔てて反対側で別の商談をしていた伊藤忠商事の役員が「その話、もう少し聞かせてくれ」と間に割って入ってきた。説明を聞くなり役員は、「ウチが保証しましょう。その代わりにウチが元請けで仕事をやらせてくれないか」と提案、トントン拍子に話が進んでいった。紆余曲折を経て倉庫は1980年11月に完成する。その後、89年に再び50億円を投資して第二倉庫を建設、現在までに倉庫５棟、計３万坪の広さにまで拡張した。

■伯父、両親の教えを守る

須崎社長は朝霞市に生まれ育ち、実家の敷地には伯父の家も並んでいた。須崎社長の母親と伯父の妻も実姉妹で夫婦揃って兄弟姉妹という珍しい家族構成であったが、伯父には子供がいなかった。そのため、甥である須崎社長は将来の跡取りとして20歳で伯父の養子となった。伯父は幼い頃から実の子の様に可愛がり、様々な人生訓を言い聞かせてきた。その１つが“世の中で一番大切なモノはお金”であるということ。拝金主義ではなく、ビジネスの世界では、“経済力がなければ、立派なことを言っても、誰も相手にしない”という経験に基づくものであった。対して実父は、“一番大切なモノは心である。いくらお金があっても、他人が困ったら、自分が犠牲になっても助けにいくような人間でなくては駄目だ”と自身の教えを説いてきた。須崎社長は双方の教えを忠実に守りながら生きてきた。

■“芸術の森”をつくり、社会貢献に力を入れる

須崎社長は丸沼倉庫の事業を拡大させる一方、社会貢献に長年、力を注いできた。その代表が“丸沼芸術の森”を通じた文化、芸術に対する支援だ。丸沼芸術の森は若いアーティストの支援を目的に、1985年に立ち上げた。自身が所有する土地に私財をはたいて１棟12坪のアトリエを計５棟建てた。その他に陶芸教室、展示室などが用意されている

近隣住民にも自由に開放されるカフェ　絵画などを鑑賞できる

ほか、定期的に須崎社長のコレクションで国内外の著名なアーティストの作品約3000点の所蔵作品を鑑賞できる展覧会や講演会も開催されている。

須崎社長が芸術を支援するようになったきっかけは、30歳で始めた“陶芸”であった。それまで陶芸をやった事がなかったので、人を介して東京芸大の学生を紹介して貰い、教えて貰うことになった。ある時、先生である学生から「須崎さん、芸術家を志す学生は、学校を卒業してもアトリエもお金もないのです。支援して貰えないでしょうか」と懇願された。須崎社長はこれこそ恩返しになると喜んで引き受ける事を約束した。これが「丸沼芸術の森」を立ち上げるきっかけであった。

須崎社長は自分の土地にアトリエを作るため、鬱蒼とした竹やぶをすべて切り倒して、そこにプレハブ小屋を建てた。芸術の森には早速、５人の若者が集まってきたが、その中の１人に現代芸術家で世界的に活躍する村上隆氏がいた。村上氏との出会いは少し前に遡る。陶芸を教えてくれた学生から、「日本画の後輩が卒業制作をやっているから、ちょっと見に行ってくれませんか」と頼まれ、須崎社長は出かけると、村上氏から卒業作品を買って欲しいと依頼され、全37点を買った。これが縁で芸術の森に入ることになった。

現在、“芸術の森”では、芸術家14人が思い思いの作品を制作しているが、活動するには条件が課されている。貸与期間は２年（更新あり）で、年１回レポートを提出しなければならない。毎年12月に丸沼芸術の森の展示会が開催され、その場所で１年の報告をする慣わしになっているが、「みんなで大ぼらを吹くんだ。私は世界に向けてこうなります、私はこうですと、大ぼらを吹く。でもそれを言えないようじゃ駄目だ」と須崎社長は目を細める。支援するのは場所の提供までで、生活費には一切関与しない。ただ、若いアーティストが個展を開くと、須崎社長はこまめに出向いては作品を買うので、結果的にそれが生活費につながる。細かな心遣いが須崎社長の気持ちを表している。

丸沼芸術の森

■ロックフェラーとの出会い

長年にわたる文化・芸術に対する支援を続けてきた須崎社長には、絵画を通じて忘れられない想い出がある。2014年、米国のバンクオブアメリカが画家、アンドリュー・ワイエスの名画『海からの風』を購入して、ワシ

アンドリュー・ワイエスとの出会い

「芸術の森」の一角に『ワイエスセンター』という建物がある。米国画家で今年生誕100年を迎えるアンドリュー・ワイエスの名に因んだもので、ワイエスが描いた水彩・素描作品のほぼすべてにあたる238点が収められている。須崎社長は、ワイエスの作品を「芸術の森」で活動する若い芸術家たちのために習作を1996年に購入した。

ある時、米国でワイエス氏に会った時、何故、僕の作品を238点も購入するのかと尋ねられた須崎社長は「あなたの絵を持つことによって、日本の画学生は勉強になる。あなたの絵を見ることによって、心が安らぐ人が多いんですよ。だから、僕はお金を出して預かるんですよ。美術品というのは、そういうものでしょう」と伝えると、ワイエス氏は“グレイト”と言って須崎社長に手を差し出し、それから二人の付き合いが始まった。

丸沼芸術の森に設立された「ワイエスセンター」

ジョン・ロックフェラー上院議員との記念写真

ントンのナショナルギャラリーに寄付した。それが縁でナショナルギャラリーでワイエスの展示会を開催することが決まった。ワイエスが描いた名作『クリスティーナの世界』の習作（練習作品）を数多く保有していた須崎社長の元に、ナショナルギャラリーから作品を貸してほしいと依頼があり、快く引き受けると須崎社長は展覧会のオープニングディナーパーティーに招待された。パーティーには各界から大勢の招待客が集まり、須崎社長は正面、中心のテーブルに奥さんと共に案内された。すると、須崎夫婦の隣に１人の老人がやってきて座った。早速、挨拶をすると、その人はジョン・ロックフェラー上院議員であった。わずかな時間であったが、ロックフェラー氏と会話を楽しむことができた須崎社長は生涯の想い出にと一緒に写真撮影を依頼、ロックフェラー氏は気持ちよく応じてくれた。「ロックフェラーと一緒の席で食事するのは二度とない」と須崎社長は大切に写真を見せてくれた。

■子供の教育や福祉事業でも貢献

須崎社長は芸術の森以外にも、小中学生向けの学習塾支援や福祉作業場の支援を行っている。学習塾は地元の主婦と街づくりの話をする中で、近所に塾がなく困っている。何とかならないだろうかと相談を受ける中、“じゃあ僕が塾を作ってやるよ”という話になった。会社所有のプレハブを直して、それを須崎社長が個人で借り、家賃は須崎社長が払う形で無償で塾に貸している。先生は人件費だけだから、生徒の授業料は半分。昨年からはテストで一定以上の点数を取ると、授業料を須崎社長が出すアイデアも採用している。また、福祉作業の支援も30年間続けている。

■理想と現実を両輪に見極めて経営と社会貢献を続ける

自分は地域に対してどんな貢献ができるのか、住みやすい朝霞市をつくるために、自分はどんな手伝いができるのか。須崎社長は常に自問自答を繰り返す。その回答を尋ねると「芸術を通じての手伝いが、自分の仕事だと思う」と須崎社長は話す。「そのためには、倉庫業をしっかり経営しないとお金が出せない。理想と現実を絶えず把握しながら目標に向かっていく」と強調する。順調に事業を拡大させ、社会貢献の幅を広げる丸沼倉庫には地元での活躍シーンがますます期待されそうだ。

企業概要　株式会社丸沼倉庫

代表取締役社長：須崎勝茂
創　　業：1969年
事業内容：貸倉庫業
本　　社：埼玉県朝霞市大字上内間木728
電話番号：048-456-3502
取引店：朝霞支店